◇　氏　家　裕　治　君

○議長（山本浩平君）　６番、氏家裕治議員、登壇願います。

〔６番　氏家裕治君登壇〕

○６番（氏家裕治君）　６番、氏家でございます。通告書に従い、質問をさせていただきます。２項目にわたっての質問になりますが、よろしくお願いいたします。

まず、１つ目、史跡白老仙台藩陣屋跡、また資料館の運営についてでございます。

１つ、象徴空間関連区域としての仙台藩陣屋跡及び資料館の運営の方向性についてお伺いいたします。

２つ目、仙台藩陣屋跡及び資料館に訪れる町内外の年間来訪、来館者数の現状と課題についてお伺いいたします。

３、ボランティアガイド育成の現状と今後の課題についてお伺いいたします。

４つ目、学校教育現場における仙台藩陣屋跡、資料館の活用によるアイヌの歴史、文化の理解を深める取り組みについてをお伺いします。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

〔教育長　安藤尚志君登壇〕

○教育長（安藤尚志君）　史跡白老仙台藩陣屋跡、資料館の運営についてのご質問であります。

１項目めの象徴空間関連区域としての仙台藩陣屋跡及び資料館の運営の方向性についてであります。史跡白老仙台藩陣屋跡は、昭和41年の国史跡指定以降、北海道最大の陣屋跡として27年間にわたり環境整備事業が行われ、併設する仙台藩白老元陣屋資料館とともに生涯学習の場として活用されてまいりました。民族共生象徴空間のポロト湖畔への開設に当たり、平成24年に陣屋跡は関連区域とされました。本町では、文化庁の指導のもと、今年度より第２次環境整備事業に着手したところであります。年度内に橋梁２基の改修工事を施工いたしますが、次年度以降につきましてはこれからの環境整備の指針となる保存活用計画を策定し、第２次整備事業に取り組んでまいります。

２項目めの仙台藩陣屋跡及び資料館に訪れる町内外の年間来訪、来館者数の現状と課題についてであります。陣屋跡への来訪者数については把握しておりません。27年度の資料館への来館者数は、4,638人となっております。そのうち、町民の入館者数は子供297人、大人1,120人の1,417人で、全入館者の30.6％を占めております。また、町外からの入館者数は子供238人、大人2,983人の3,221人であります。このうち有料入館者数は3,217人であり、ここ４年4,000人台を下回っており、有料入館者の減少が課題であると捉えております。

３項目めのボランティアガイド育成の現状と今後の課題についてであります。陣屋の解説をボランティアで行う資料館友の会は、昭和59年の資料館開館時に設立されました。現在７人の方々が解説活動を行っております。来館者とともに学び、そして親しみのある解説を活動方針にご活躍いただいているところでありますが、会員がふえないことと高齢化が課題となっております。

４項目めの学校教育現場における仙台藩陣屋跡、資料館の活用によるアイヌの歴史、文化の

の理解を深める取り組みについてであります。平成27年度の町内小中学校の利用実績は、小学校２校48人で、３、４年生が校外学習のため来館しております。また、白老東高校１年生120人が総合的な学習として毎年１日行程で資料館とアイヌ民族博物館を訪れております。陣屋跡や展示資料から仙台藩とアイヌとのかかわりなど郷土の特徴的な歴史や文化に触れ、理解を深める取り組みを行っております。一方、小学校の社会科副読本においても、「昔のくらしとまちづくり」として全130ページ中の30ページを割くなど、全ての児童生徒がアイヌと陣屋の歴史やかかわりなどを学んでおります。

○議長（山本浩平君）　６番、氏家裕治議員。

〔６番　氏家裕治君登壇〕

○６番（氏家裕治君）　６番、氏家です。このたび史跡白老仙台藩陣屋跡、また資料館の運営についての質問ですが、後から質問します２項目めの高齢者大学とのかかわりもあるものですから、重なる部分はちょっとご容赦していただきたいなと思います。子供の部分の教育、そして大人の部分の教育という、そういった大きな２つの観点からこの歴史認識についてちょっと議論させていただきたいなと思います。

私は教育者でもありませんし、教育学を学んだわけでもございませんので、教育長と議論するというのはどうなのかなと思いますけれども、最近資料館の中で学芸員さんの説明を受ける、そういった機会がありましたものですから、そういったことの中から感じられたことを教育長のほうにお聞きしていきたいなと思います。仙台藩が白老に元陣屋をつくって12年間の間の生活、暮らしがあの資料館の中におさめられているということであります。仙台藩とアイヌの人々の暮らし、またかかわり、共同について学芸員の方から資料館にていろいろな説明を受けました。そのときに改めて私思ったのです。アイヌ文化に対しての無知さというか、ああ、こんなこともあったのだということを改めて知らされたような気がしました。余りにも私たちは身近に感じていて、表面の薄っぺらいところで理解していたのではないのかなと思うのです。これというのは私だけなのかなと思って、そういうことを踏まえながら町長にも聞いておいていただきたいのです。

これから象徴空間整備が進んで、仙台陣屋の跡、また資料館も関連区域の中で位置づけられるということになりますけれども、他方から来町される方々に対して、白老町に住み、暮らす私たちがちゃんとした歴史観を持ってアイヌ文化を理解しないと2020年を心から笑顔で迎えることができない、そう感じたのです。町長が進めようとしている多文化共生の意味を理解するスタートラインにも立てない、本当にそう思ったのです。そういった観点から何点か質問させていただきたいと思います。まず、運営の方向性についてであります。象徴空間の関連区域として、この仙台陣屋跡及び資料館への来訪、来館者数、どのように想定しているか。2020年、国では100万人とも200万人ともいう想定をしているけれども、象徴空間関連区域としての仙台陣屋跡、先ほど位置づけについては前議員が質問されていましたので、それについては結構です。ただし、来訪、来館者数を今後どのように想定して整備を進めていこうとしているのかをお伺いしたいと思います。

○議長（山本浩平君）　武永生涯学習課長。

○生涯学習課長（武永　真君）　先ほど教育長からの答弁で昨年度の入館者数は4,638人だというふうなことでお答えさせていただきました。実は、資料館というのは昭和59年にできていまして、もともとは１万人を超えていた入館者がありました。例えば一番多かったのは昭和60年の１万2,232人、平成元年までは１万人だったのです。ところが、最近ずっと減っておりまして、近年は有料入館者も団体者も減ったということで、このような数字になっているところです。象徴空間の計画では100万人というような話で、もちろんその関連区域ですので、もっともっとＰＲをして、資料館も史跡も充実させた中でふやしたいというふうには思っております。その中で、少なくとも資料館の開館した当時の１万2,000人台、こちらぐらいまでにはどうにか近づけるように頑張ってまいりたいなというふうに思っております。

○議長（山本浩平君）　６番、氏家裕治議員。

〔６番　氏家裕治君登壇〕

○６番（氏家裕治君）　６番、氏家です。今課長のほうからお話がありました。１万2,000人という数値目標、私は１万2,000人でも２万人でもいいのですけれども、先ほどから言われているように国立博物館、そしてこの資料館、こういったものを一体的に考えて人を促さなければ、本来の意味で、本来のアイヌ文化の勉強といいますか、体感ができない、そう感じるのです。ですから、僕は目標はもっと高いところに置いて、そのためには例えば今点と点を結んでいるフィールドミュージアム的な考え、それをしっかり足元も考えながら、そこに来館される方々のことも考え、交通手段のあり方、これを今から想定して考えていかなければいけないのではないかなと、こう思うのですけれども、点と点を結ぶ、仙台陣屋だけではないのですよ、フィールドミュージアムというのは違うのですけれども、今回は仙台陣屋に特化してお話をさせていただきたいのですけれども、そこを結ぶ交通手段のあり方についてもし考え方があれば、お伺いをしておきたいと思います。

○議長（山本浩平君）　武永生涯学習課長。

○生涯学習課長（武永　真君）　交通手段までは、恐れ入ります、そこまでは考えてはございませんでした。ただ、アイヌ民族博物館の職員とはどうにか博物館と陣屋をつながないといけないというような話で、共通入館券なりもつくってきた経緯がございますし、また博物館が２年閉館になります、将来的に。そのときにじっくり腰を据えて、どのようなやりとりが資料館と陣屋でできるのだろうか。そのときには、多分国の職員も入ってくると思いますので、そんな中で考えたいと思います。また、サイン表示、あの辺についても将来的には環境整備の中で行えるのではないかというふうに思っておりますので、そこら辺の周知もやってまいりたいと思っています。

○議長（山本浩平君）　６番、氏家裕治議員。

〔６番　氏家裕治君登壇〕

○６番（氏家裕治君）　６番、氏家です。わかりました。これからまだ時間がありますので、その中で国との方向性についてもしっかり考えていただければと思います。

　もう一つ、これから国際的な人材交流、人材交流といいますか、人の流れができると思うのです。その中で、今例えば登別管内でもそうです。ホテル街もそうですけれども、ワイファイ

という、そういう通信手段がどうしても必要になってくるのです。海外の人は特にそうです。ワイファイの整備については、これからしっかりとした準備も必要ですし、予算化も必要になってくるのです。ですから、そういったことについての考え方を今持っていらっしゃるのかどうか。そして、それを2020年を迎えてから用意するのではどうしようもないのです。2020年前にしっかりとそういった整備を進めていかなければいけないと思いますが、その辺についての考え方をお伺いをしておきます。

○議長（山本浩平君）　武永生涯学習課長。

○生涯学習課長（武永　真君）　ワイファイが使えるというようなところについては、近年至るところで耳にするようなところでございます。例えば資料館におきましても、実際どれぐらいお金がかかるのだろうかというようなことで調べた経緯がございました。余り高いものでもないのかなとは思いますけれども、資料館内で使うもの、あるいは史跡を通じて使うものによってはかなり金額的な差がありますので、ただこれにつきましては資料館だけの話ではなくて、まち全体の観光施設ですとか、お立ち寄りいただくようなところの話もございますので、まちのほうで全体で考えさせていただけたらというふうに思います。ただ、資料館の展示の中身につきましては、現在は日本語だけでございます。そんなようなことで、多言語化については将来的に、できれば近い将来的に考え、実施したいと思っております。

○議長（山本浩平君）　６番、氏家裕治議員。

〔６番　氏家裕治君登壇〕

○６番（氏家裕治君）　６番、氏家です。ワイファイの環境整備についてのお話なのですけれども、これは近年海外から来られる方々は、例えばタブレットだとかアイフォーンだとか、そういったものを持ち歩くのです。そして、自分なりにそういったもので検索をしながら調べるのです。後からお話ししますけれども、今多言語の話がありました。後で話をしようと思ったのですけれども、資料館の中で例えば多言語化を解消するためのタブレットの活用なんかも今後必要になってくるのではないかと思うのです。それについては後でお話ししますので。ですから、一応そういったことも含めて早期にワイファイの整備についてはまちを挙げてしっかりとした計画の中で2020年を迎えるようにしていっていただきたいと、そう思います。

それと、２点目になります。年間の来訪、来館者数の現状と課題についてお伺いしましたけれども、教育長のほうから町民の入館者数についての答弁がありました。大人が1,120人、町民です。１人来館者の入館料というのは200円なのです、あそこの入館料というのは。これで考えると２万2,200円ですか、1,120人。でも、1,120人の中には無料の方も多分いらっしゃるのですよね。有料の町民の来館者数、一般で行って見てくる人たちの来館者数はいいです。入園料、全体でどれぐらいになっているのか。1,120人で２万二千何ぼですから、それから無料の人たちを引いたら多分それより下になると思うのです。参考的にちょっと教えてください。

○議長（山本浩平君）　武永生涯学習課長。

○生涯学習課長（武永　真君）　それでは、申し上げます。

平成27年度の有料の町民です。103人です。に対しまして収入が１万8,860円になりました。平成26年度は入館者が91人です。に対しまして入館料が１万5,680円。平成25年がちょうど

100人、１万7,800円という実績でございました。

○議長（山本浩平君）　６番、氏家裕治議員。

〔６番　氏家裕治君登壇〕

○６番（氏家裕治君）　６番、氏家です。一般の町民の方々の来館者数から見た収入の話、町長今聞いていらっしゃったと思います。２万円切るのです。そういったことから考えても、期間を限定してもいいです。例えば2020年まででもいいですから、この４年間なら４年間を例えば町民の方々を無料にして、来てもらって体感をしてもらって、ちゃんした歴史、文化を学んでもらう。学んでもらうというよりも、そんなおこがましいことではない。歴史、文化に触れてもらう。そういうことって僕は大事なことではないのかなと思うのです。先ほども言いました。私も初めて行って、学芸員の方々の話を聞いて、そして改めてこんな歴史があったのだとか、こんな文化があったのだと。例えば仙台から北海道に来て、白老に来て、アイヌの人方からこういった考え方、知恵をいただいて、そして生きてきたのだと、そこに暮らしがあったのだと。本当に頭に入ってくるのです、すっと。ただ自分たちが資料を眺めて歩くだけではなくて、それが一番手っ取り早い。手っ取り早いと言ったら変ですけれども、一番いい方法だと思うのですけれども、教育長、どうですか。

１万幾らとかの入館料のために町民の足を遠のけるのではなくて、私も一回あったのです。近くまで行って、入館料200円、家内と一緒に行って、きょうはいいかと帰ってきた記憶があるのです。近くまで行く人というのはいると思うのです。だから、自由に入ってくださいと、そして歴史、文化に触れてくださいと、そうすることが僕はすごく町民にとって有意義なことになると思う。町長の言う多文化共生なんて、もしかしたらその辺から始まるのかもしれないなと僕思うのです。その辺についての考え方がもし無理だと、今の財政的にこういう困難なときにはそこまではちょっと無理だというのであれば、それはそれで構わない。でも、私が考える多文化共生と、それからアイヌ文化を町民が理解する一つの過程、またアイヌ文化に触れる一つの機会というのはそういうところからでないとできないような気がするのです。興味を持てば、例えばこれからできるであろう国立文化博物館だとか、現在の博物館に行ってもっと勉強してみようとか、もっと歴史に触れてみようと、そういう形になっていくのではないかと思うのですけれども、その辺についての考え方をちょっとお伺いしたい。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　私が白老小学校におりましたとき、仙台の片平丁小学校の子供たちと交流をしておりましたけれども、まず来て訪れるのは仙台の資料館を訪れておりました。そういった意味では、町外の方々が非常に訪れている割に、それに比べて地元にいらっしゃる皆さん方が非常に来館者数が少ないということの実態は改めて大きな課題というふうに受けとめております。少しでも町民の皆さんが議員がおっしゃるように自分たちの足元の理解からスタートしていくという意味では、こういった料金の問題も検討してみたいというふうに考えております。きょうこの場で即答して、いつからいつまで無料にするとかということについてはちょっと差し控えさせていただきますけれども、十分今のご指摘いただいた趣旨を受けとめながら、今後内部、あるいは予算といっても２万円ぐらいの予算なので、町政を揺るがすような大

きな問題ではないと思いますけれども、関係課ともちょっと相談しながら前向きに考えてまいりたいというふうに思っております。

○議長（山本浩平君）　６番、氏家裕治議員。

〔６番　氏家裕治君登壇〕

○６番（氏家裕治君）　６番、氏家です。私は、2020年を町民みんなで本当に笑顔で、本当にすばらしい財産が白老にできたという思いで迎えるのだとすれば、そういう思いの中で仙台陣屋、そして国立博物館の周辺整備、関連区域の関係、そういったことについてちゃんと目標を定めて進んでいくべきだ。先ほども町長言っていました。しっかり目標を定めて、そして何のためにそれをつくるのか、何のためにそこに町民の理解を求めるのかとかということも含めてしっかり考えていただきたいなと思いました。

総括的な部分については後で町長からお伺いしますけれども、３点目のボランティアガイドの現状と課題についてお伺いしたいと思います。先ほど教育長からの答弁にもありました。現在７人の方々が解説活動を行っていて、今後の課題としては高齢化、そういった問題があるのだということは十分わかりました。私たちも議会で長崎さるく、長崎のほうでそういった高齢者のボランティアガイドの方々の説明を受けて、そして本当に感動して帰ってきた、そういう思い出があります。自分たちのまちにもそういう時代が来るのかなと思うとちょっと感慨深く、このボランティアガイドさんの話を聞いていましたけれども、ガイドによる解説、説明を聞きながら感じることは、ガイドさんの説明というのはやっぱり心に残るのです。そして、ガイドさんは自分の学んだことを人に一生懸命伝えよう、伝えようという、そういう意欲があるのです。ですから、ガイドさんによって話し方も違えば、答えに持っていくまでの流れの違うガイドさんもいらっしゃると思います。でも、その心が伝わるのです。ですから、来た人たちは、ああ、なるほどないうふうに感じて帰るのです。ですから、本当に私大事なことだと思うのです。

それで、先ほどもお話ししましたが、インターネット上で見るボランティア解説員による展示解説は、５月から10月までの間の毎週土曜、日曜日の午前10時から３時までとなっているのです。また、平日でも事前に予約していただければ、団体のお客さんに限り受け付けますとなっているのです。これはこれで僕いいと思うのです。でも、こういうところでガイドさんの役割を果たしていただくのであれば、それ以外の時間帯も、またガイドさんがガイドをされるときも、外人のお客様、外国から来られるお客様のためにも先ほど言ったタブレットというのがやっぱり必要になると思うのです。多言語翻訳をされるタブレット、資料館、そして史跡、そういうところの歴史認識を一緒に共通の話題として取り上げるためにもそういったタブレットはどうしても必要になってくると思うのです。新たな通訳の方々を雇ってだとかなんとかではなくて、今いるガイドさんたちのできることとそれにプラスアルファしてそれを補完する、言語の補完をするタブレットの活用というのは十分必要になってくると思いますので、これについても部局内でしっかり捉えながら、これは仙台藩の資料館だけではなくて、今後博物館の関係でも当然必要になってくると思いますが、そういった形の中での取り組みをお願いしたいと思います。先ほど課長からちょっとお話あったので、これについてはこのぐらいにしておきま

す。

それで、次、４点目に入ります。学校教育現場におけるアイヌの歴史、文化の理解度についての話でした。先ほど教育長のほうからお話があったとおり、それから昨日もふるさと教育のお話をお伺いしましたし、今回は東高校の１年生が例えば資料館と民族博物館、理想的ですよね、そういう教育をされている。わかりました。十分理解しました。私が思うのは、ふるさと学習の大切さというのは、文化を学んで、そして体験をし、そして生き方を学ぶということにつながっていくのだろうと、これからの自分たちの生き方も含めてです。そういったところにつなげていける。そういった学習というのは生涯的にもつながっていかなければいけないのではないかなと。今東高校の話がありましたので、そういったことも通じながら、自分たちの生涯的な学習として取り組んでいかなければいけないものなのだろうなと。そのとき、そのとき振り返りながら取り組んでいかなければいけないのではないかなと思うのです。

子供たちは、地域社会の中でどう生きていくのか、またどうかかわっていくのかということを常に心の中の原点に置きながら生きていくことが大切なのだろうなと思うのです。それは、小学校、中学校、高校を通して身についたものがそういったところにあらわれてくるのだろうなと、生き方の中であらわれてくるのだろうなと僕は感じるのです。仙台陣屋資料館で学ぶことは本当に意義深いものがあるのではないかなと自分なりに考える。大人で考えるのです。自分なりに考えるのです。学芸員からの解説だとか、そういったものは仙台の地から北海道に来た仙台藩の人たちがアイヌの人たちにどのような知恵をかりて暮らして、そして任務に当たったのかということが本当に目に浮かぶようにわかるのです。人と人とのかかわりが社会を構築しているとすれば、現代社会の中にもしっかりと受け継がれていかなければいけない。だから、生涯学習として取り組まなければいけないと思うのです。現在といいますか、今は情報社会ですから、テレビだとかいろいろなものから見えてくるものは、地域コミュニティーの形成が難しいと言われるのです。町内会活動が難しい、町内会に入ってくれる若い人が少なくなってきただとか。今の考え方というのはそれと逆行するのです。だから、これからのふるさと学習に期待するのです。白老町のふるさと学習というか、ほかでも取り組んでいるのかもしれない。ふるさと学習をしっかり生涯学習として位置づけて学んでいくことがこれからの社会の中でどうやって生きていくのか、どうやって生きていかなければいけないのかということにつながっていくものですから、これからのふるさと学習の取り組みをいま一度、考え方というか、進め方をお伺いしておきたいなと思います。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　現在アイヌ文化あるいは歴史ということについて本町で進めておりますふるさと学習の今後の展開ということでお答えしてよろしいでしょうか。

きのうもちょっと答弁させていただいた部分もございますけれども、2020年に国立博物館が開設されますので、これはまちづくりにとってもビッグチャンスでありますけれども、私は教育にとってもビッグチャンスだというふうに考えております。そういった意味で、これまで民族博物館とのかかわりの中でアイヌにかかわるさまざまな学びを通してまいりましたけれども、今後はそういった施設の活用、それからあわせて今回ご質問いただいております仙台陣屋

の資料館、これが実態としてまだまだ学校での活用は今後考えていかなければならないなというふうにも今改めて感じておりますので、ふるさと学習という一つのくくりの中で国立博物館と陣屋の資料館、この２つを連動させながら、より一層ふるさと学習の充実に努めてまいりたいというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　６番、氏家裕治議員。

〔６番　氏家裕治君登壇〕

○６番（氏家裕治君）　６番、氏家です。それでは、次の質問に入りたいと思います。高齢者大学の現状と課題についてということでございます。

まず、１つ目、近年の学生数の推移についてお伺いします。

２つ目、高齢者、学生ですね、生徒さんへの通学支援が必要と考えておりますが、まちの考え方についてお伺いいたします。

３つ目、アイヌの歴史、文化にかかわる学習の状況についてお伺いいたします。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

〔教育長　安藤尚志君登壇〕

○教育長（安藤尚志君）　高齢者大学の現状と課題についてのご質問であります。

１項目めの近年の学生数の推移についてであります。白老町高齢者大学は、昭和49年４月に98人の学生をもって開校いたしました。学生数は、平成11年度の384人をピークに、18年度まで300人を超えておりましたが、26年度に200人を切り、現在184人と年々減少している傾向にあります。

２項目めの高齢者大学学生への通学支援に対する町の考え方についてであります。28年度の学生数184人のうち69％、127人が女性で、また全体の半数以上が白老地区以外からの通学者であります。平均年齢も高齢化し、学習センターまでの通学手段が負担となっております。現在循環バスについては時間帯のずれなどの課題がありますが、今後その活用について検討してまいりたいと考えております。

３項目めのアイヌの歴史、文化にかかわる学習の状況についてであります。28年度は多文化共生をテーマとした講座を開講したほか、アイヌ民族博物館への学年研修も行われました。また、町長による象徴空間についての講話を通して、ボランティアなど主体的にかかわろうとする学生の意欲が高まっております。来年度は、アイヌ民族博物館を会場とした定例講座やポロト湖畔での地域学講座も計画しているところであり、教育委員会といたしましても学生が組織的、継続的に象徴空間のサポーターとしてかかわれる施策を考えているところであります。

○議長（山本浩平君）　６番、氏家裕治議員。

〔６番　氏家裕治君登壇〕

○６番（氏家裕治君）　６番、氏家です。それでは、今回の質問の趣旨は前段でお話しさせていただきましたので、それにのっとってお話を何点かお聞きしたいと思います。

近年の学生数の推移については、今教育長のほうから答弁ありました。高齢者大学というのは、４年間在籍をするのです。その後は研究課程に入られる方がいらっしゃると思います。研究課程にいらっしゃる方々の人数を抜いた在校生といいますか、学生さんが今どれぐらいいら

っしゃるのか、ちょっとお伺いしておきたいです。

○議長（山本浩平君）　武永生涯学習課長。

○生涯学習課長（武永　真君）　平成28年度、今年度ですけれども、在校者数は184人です。そのうち１年生から４年生までが49人、パーセンテージでは27％というふうになっております。

○議長（山本浩平君）　６番、氏家裕治議員。

〔６番　氏家裕治君登壇〕

○６番（氏家裕治君）　６番、氏家です。今お伺いすると184名のうち、例えば27％の方々が新しい学生さんといいますか、新規の４年生までの間の学生さん、残りは研究課程の方々。このまま推移していくと高齢者大学というのはどんどん衰退していくのだろうなと。高齢者大学の位置づけについてしっかり考えていかなければいけないのではないかなと思うのです。何のために高齢者大学というのをつくったのか。ここに学則があるのです。この学則の中には、すごいなと僕改めて感じるのですけれども、例えば学習内容、大きく６つあるのです。社会の変化への対応、これを考えて学習をする。若い世代の理解と交流を。そして、心身の健康の保持と増進なのだと、大学へ来ることが。そして、生きがいと社会参加なのですということなのです。経済的な安定と自立を促すのだと、それは元気でいて、そして何かあって社会参加をしていきながら、少しでも、お金が残るわけではないのかもしれないけれども、ちょっとした趣味というか、簡単に言うと例えば高齢者大学さん、ボランティアガイドさんを何とかお願いしますといったときに、いいですよ、二、三カ月時間下さい、そういった人たちを集めますからというような、その中で自分たちの思いを社会参加の中で生かすことができる。そのためにちょっとした靴も買おうかしらとか、有料ボランティアのお金でですよ、もしかしたら足し増ししなければならないかもしれない。でも、そういう楽しみがあってやることって大事なことだと思うのです。こういう学習内容がここに刻まれているのです、学則の中に。こういう形の中で今の高齢化社会を支える大きな役割が僕はここにあるような気がしてならないのです。であるとすれば、これからの大学、新入生が減ってきたのだと、こういう課題があるのだと、それにはしっかり手をつけなければいけないのだと思うのだけれども、その辺についての考え方をちょっとお伺いしておきたいと思います。

○議長（山本浩平君）　武永生涯学習課長。

○生涯学習課長（武永　真君）　議員さんおっしゃるとおり、高齢者大学というのは毎年人数が減ってしまっております。200人切ったかなと思ったら、もう180人台で、来年もどうかわかりません。毎年新入生としては十二、三人の新入生があり、また亡くなられたり、あるいは介護のためやめられたり、また足の問題でやめられたりという方が本当に多いのです。また、平均年齢も現在78.2歳なのです。ところが10年前ぐらいですと75歳というようなことで、年齢が上がってきています。ということで、課題も多いところで、学生さんたちからもそこら辺、特に足なのですけれども、どうにかならないかというようなお話をいただいており、大学の職員の方、あるいは課内のほうでその方策について考えているところではあるのですが。

○議長（山本浩平君）　６番、氏家裕治議員。

〔６番　氏家裕治君登壇〕

○６番（氏家裕治君）　私はこういった学則なんかから読み取れるのは、これからの高齢者の方々、例えば働く場所が幾らできても、そこに若い人たちが行ってしまうと、例えばこれから迎える象徴空間の中でボランティアの方々ちょっと来てください、集めましょうといったってなかなかいなくなるでしょう。いなくなったときに、ではどうするのと、ほかから持ってくるのという話ではなくて、私は今の高齢者大学に目を向けるのは自然な流れだと思うのです。高齢者の方々は、例えば自分の時間を有意義に使えて、意欲があったり、そして社会参加、そこに来たいという方々だってパーセンテージ的には結構高いわけでしょう。そうなったら、高齢者の方々こそ人材であって、そして大学は人材の宝庫です。そこで、町のこれから目指すいろいろな方策を、また仙台陣屋だとか陣屋資料館との連携の中でやっていくことというのは大事なことなのではないかなと思うのです。これは、例えば歴史、文化の関係のボランティアガイドさんだとか、そういったものの育成だとか、そういったものだけではなくて、今後の考え方として高齢者大学をもっとうまく活用していくべきではないのかなと思うのですけれども、その辺についての考え方をいま一度お伺いしたい。

○議長（山本浩平君）　武永生涯学習課長。

○生涯学習課長（武永　真君）　高齢者大学は、学生さんたちが自主自立というようなことで運営委員会を組みまして、今年度、来年度どのようなカリキュラムを行っていくのかと、どのような講師を呼んでどのような講座内容にするのかと、そういうようなことを話し合っております。先ほど教育長からのお答えにもありましたとおり、町長にも町政講話というような中で象徴空間の進捗状況に合わせてお話をいただいているところで、それだったら我々には何ができるのだろうと、もうちょっと象徴空間ですとかアイヌの文化、そしてまちの歴史について勉強したいと、そういうような声が上がってきております。それを受けまして、高齢者大学の職員のほうで我々と話し合って、来年度こんなような計画を少し組もうというようなところなので、母体としては非常に大きな学習、自主自立の人方がいらっしゃるので、どうにかお願いして、運営委員会にもお願いしてそのような方向でいきたいなというふうに思っております。

○議長（山本浩平君）　６番、氏家裕治議員。

〔６番　氏家裕治君登壇〕

○６番（氏家裕治君）　６番、氏家です。それでは次に、大学生の通学支援についてのお話です。教育長のほうから今後の取り組み、考え方、課題も含めて答弁をいただきましたが、例えば今の元気号をうまく利用しようと思ってもなかなか難しいところもあるかもしれない。できるかもしれないですけれども、ただ虎杖浜から大学に来るのにいろいろなところを経由して１時間半も約２時間近くもバスに揺られてくるのがいいのか、財政的に例えば新たなバスの運行を考えてやるのがベストなのか。その位置づけなのだと思うのだけれども、それでもやるのだと、そうやってやるのだというのであれば、それはそれで一番いいのかもしれないけれども、直通で40分、35分ぐらいですかね、虎杖浜から真っすぐ来れば、何人か国道沿いで拾ったとしても。それぐらいだったらいいのかもしれないけれども、もしそれができないのであれば、分校的な考え方ってできないのですか。先ほど教育長の答弁の中から、約半数は白老本町外の方です。例えば北吉原から虎杖浜方面の方々なのではないかなと思うのですけれども、であれば、

これが可能かどうかはわかりませんけれども、例えば竹浦小学校、これ今すぐ壊すといったってそれだけの予算あるわけではないでしょうから、ある程度の補修をかけて、例えば竹浦小学校を考えるだとか、焼き物の機械が今本校にしかないのであれば、そのときだけ何とか手だてをしながらやるだとか、分校的な考え方もあっていいのではないかと思うのですけれども、そうすると通学に係る時間的なものだとか、いろいろな選択肢が広がるのだと思うのです、学生さんにとっては。ですから、そういうことも考えるべきではないのかなと思うのですけれども、年に何回かの本校との交流を交えながらでも、やり方によってはいろいろなやり方があるのではないかと思うのですけれども、その辺についての考え方はいかがでしょうか。そうすることが生徒さんたちの減少を食いとめる一つの、それでもって食いとめられるかどうかはわからないけれども、やってみる価値はあるような気がするのです。その辺についての考え方をお伺いしておきたい。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　今議員からご提案のありました件については、実は私自身も考えていたところでございます。今一つのセンター的な学びやがあって、そこに多くの高齢者の皆さんが通学をされているという状況があります。ただ、これからますます高齢化が進む中で、通学の足の確保というのは大変大きな課題だと思っております。具体的に今すぐ来年、再来年というところの具体性という部分についてはまだまだないのですけれども、きのうお話いろいろございましたコミュニティ・スクールというようなことも私はこのことにかかわってくるのかなというふうに考えております。将来的には各地域にある子供たちの学びの場が高齢者の方々にとっても学びの場になっていくということが通学の足という問題を解消していく大変有効な捉え方ではないのかなというふうに考えております。ただ、具体的に今議員のほうから提案ございました旧竹浦小学校の活用というようなところについてはまだ具体には至っておりませんけれども、本町が今抱える高齢化の問題に対応していくための高齢者大学のあり方としては今後このことについて真剣に向き合っていかなければならないのかなというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　６番、氏家裕治議員。

〔６番　氏家裕治君登壇〕

○６番（氏家裕治君）　６番、氏家です。最後の質問になりますけれども、アイヌの歴史、文化にかかわる学習の状況については、先ほど答弁いただきました。さまざまな学習を通しながら高齢者の方々も大学の中で学んでいるのだなということがよくわかりますし、また今後行われます授業の内容についても理解をいたしました。

私は、高齢者大学には多様化する社会構成、先ほどもありました学則の中の社会の変化への対応だとかという部分で考えると、多様化する社会構成の中で明るく健康な高齢者の育成を図る使命というのが大学にはあるのだと思うのです。これは、一般町民として考えたときに、学術というよりも福祉的な考え方なのです。一歩家から出て、そして知らない、知っている人もいるかもしれない、でも知らない人と会う、交流をすることによって今までの自分たちの生活を一歩また広げていく一つの役割がそこにもあったり、そして一歩家を出ることによって自分

たちの健康にも資するような、そういう役割がそこにあるのだと思うのです。ですから、先ほども言ったけれども、僕は学術的なことでの話はできないけれども、例えば高齢者の福祉の関係からも大変重要な役割を果たす施設だと僕は思っているのです。ですから、財政は今整わないかもしれないけれども、財政が整ったときにはある程度の支援を高齢者大学にしながら、そして高齢者の方々の生きがいと社会参加の体感、こういったものに寄与していくことがこれからの白老町にとって本当に大事になってくると僕は思うのです。ですから、子供たちの教育と、それから60歳以上が入れると言われている高齢者大学、ここの充実がこれからの白老町を支えていくというふうに言っても僕は過言ではないと思っているのです、本当に。大げさではなくて。ですから、ここの充実を図っていく。そういった中でまちづくりの中で高齢者大学というのをしっかりとした位置づけに置いてもらわないといけないのです。ああ、高齢者大学もあったなではなくて、高齢者大学、ここをどうするのだという感覚でこれからの財政の中に一つの位置づけをしていかなければいけないのではないかと僕は考えるのです。その辺についての考え方をお伺いしておきたい。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　これまで一つの学びの場ということだけではなくて、高齢者の皆さんのまちづくりへの参画でありますとか、あるいは学校教育へのかかわりでありますとか、いろいろお話を伺いながら、高齢者大学が人財、人の宝という財産、そちらのほうの人財としてのまさに宝庫だというお話を伺いながら、改めて高齢者大学の充実、学生の皆さんがこれまでの知恵や経験を町のまちづくりに発揮していただける環境づくりを教育委員会としても向き合っていきたいというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　６番、氏家裕治議員。

〔６番　氏家裕治君登壇〕

○６番（氏家裕治君）　６番、氏家です。最後になります。教育長のほうからいろいろな部分で答弁いただきました。これは、教育長だけではなくて、町長のこれからのまちづくりの中でも大変重要な部分を僕は占めると思っていますので、町長のほうからも一言お話を伺いたいのですけれども、子供たちはふるさと学習等々から人としての生き方を学んでいくのです。例えばキャリア教育だとかいろいろな部分で人としての生き方を学ぶ。我々大人は、ちゃんとした、ちゃんとしていないとは言いませんけれども、ちゃんとした歴史認識に立った上で若い世代との交流をしていかなければいけないのだと思います。そうすることが町長の言う多文化共生社会の構築を目指す上で本当に重要になってくるのではないのかなと、僕はそこが一番の底辺だと思っているのです。今後も高齢者大学の果たす役割というのは大変大きいと思いますし、子供たちの教育の部分についても大変重要なことだと思っていますから、子供たちの教育、それから大学の必要性については教育長のほうからある程度の答弁いただきましたけれども、町長のこれからの考え方についても最後にお伺いしておきたいと思います。

○議長（山本浩平君）　戸田町長。

○町長（戸田安彦君）　仙台藩の歴史と高齢者大学と子供の教育というお話を総合的にお話をさせていただきたいと思います。

まず、仙台藩元陣屋の資料館については、白老町の貴重な歴史の一つだと思っておりますので、これは象徴空間の関連施設の位置づけではありますが、これまでも白老町の歴史や観光の部分でもきちんと担ってきた役割だというふうに思っております。今年度から象徴空間を見据えて、館長と歩く白老歴史探訪ということで、地元学ということで、まだ人数は少ないのですが、いま一度仙台藩陣屋資料館を見直す事業も進んでおります。

それとあわせて、今度は高齢者大学のほうなのですが、先ほど氏家議員がおっしゃっていたように、家から一歩出てもらうということの一つのツールとして高齢者大学もありますし、今までの長い歴史の高齢者大学の役割もあったので、一言で言うとやっぱり高齢者の生きがいづくりの場だというふうに私も思っております。先ほど分校の考え方も、虎杖浜から社台まであることを考えますと考え方としてはこれからそういうやり方をしていかなければならないなと思っていますし、先ほど教育長のコミュニティ・スクールの話もありました。コミュニティ・スクールは地域でつくっていく学校ということを考えますと、高齢者の方々の人生経験を子供たちにどういうふうに伝えていけばいいかの場づくりにもなると思いますので、この考え方には私も賛同いたしますので、これは前向きに検討していきたいというふうに思っております。

歴史認識なのですけれども、多文化共生にもつながるのですが、違うお互いを認めるということは、それぞれの歴史も認めるということで私思っています。それは、いいとか悪いではなくて、こういう事実があったのだと、その上で私たちの生活が成り立っているというのは大変勉強になりますし、そのもとが仙台藩元陣屋資料館にもあると思いますので、この辺は先ほど無料化のお話、ちょうど財政健全化プランも、金額は今回の資料館の入場料は安いですけれども、健全化の見直しの年でもありますので、先ほど教育長も話したとおり前向きに検討していきたいというふうに考えておりますし、仙台藩元陣屋資料館を使って白老町の歴史をいま一度、知らない方にもお知らせする事業も組み立てていきたいと考えております。

○議長（山本浩平君）　以上をもちまして６番、氏家裕治議員の一般質問を終了いたします。